

審 議 事 項

令和 4 年度堺市指定文化財指定候補資料

種 別	無形民俗文化財
名 称	住吉大社宿院頓宮の祓神事 <small>（はらえしんじ あらにごのおおはらえしんじ）</small> （荒和大祓神事）
所在の場所	堺市堺区宿院町東 2 丁 1-6
解 説	

住吉大社宿院頓宮の祓神事（荒和大祓神事）は、かつては旧暦六月晦日、現在は 8 月 1 日に住吉大社の神輿を堺の宿院に迎え、頓宮境内の飯匙堀（いいがいぼり）で行われている祓（はらえ）の神事である（図 1）。

飯匙とは飯を盛るための「しゃもじ」のことで、堀の形が「しゃもじ」に似ていることから飯匙堀または飯匙の池と名付けられたとされる。貞享元年(1684)刊行の『堺鑑（さかいかがみ）』に「六月晦日に神輿を宿院の飯匙堀へ遷玉（うつりたま）ふも干珠（かんしゅ）をすゞしめの為なり」と記されているのが飯匙堀の初見で、海幸山幸神話の山幸彦（『日本書紀』では彦火（ひこほ）出見尊（でみの））が所持していた潮干珠（しおひるたま）が埋められているとも伝えられている。

現在の飯匙堀は、中央に注連を張った岩が置かれた正方形に近い空堀である。堀の西側と東側にそれぞれ石鳥居が建てられ、堀を含んだ神域を囲う玉垣と、宿院町公園との間にさらに 1 基の石鳥居が建てられた神聖な空間である。祭りの当日には宿院町公園との境の石鳥居に茅の輪がくくりつけられる。

8 月 1 日夜の荒和大祓神事は、住吉大社によって司られており、最初に祓主の神職が荒和大祓の詞を奏上した後、参列者がそれぞれ手に持った茅草で身体を撫で、息を 3 度吹きかけて草を半分に折る。続いて神職が前に進み出て、大麻のついた榊の枝で北側の宮司ほかの祭員、南側の参列者、東側と神域外にいる参拝者たちをそれぞれ祓う。3 人の神職が参列者の茅を集め、集めた茅を唐櫃の中に納める。最後に祓主が前に進み、祓物の白布（さらし）（晒）を 8 つに引き裂く。祓に使った榊の枝と茅も 2 つに折り、八つ裂きにした布と一緒に白い紙で包み、唐櫃に納めて、神事は終了する（図 2）。

本神事は、摂津国一の宮で大阪市住吉区に鎮座する式内社住吉大社の「住吉祭」の一連の行事の中で催行されている。現在の住吉祭は、新暦 7 月上旬におこなわれる（いつきめ）斎女宣状式から始まり、海の日におこなわれる汐汲神事、神輿洗神事を経て、7 月 31 日に住吉大社境内で催行される夏越（なごしのはらえ）祓神事、8 月 1 日の神輿渡御（通称「おわたり」）でクライマックスを迎える（表 1）。祭りの日の堺のまちには、与謝野晶子が「私の生ひ立

ち」(大正四年・1915)で、「あらゆる諸国の人が集つたかと思はれた程この日には遠い田舎からも見物に出て来る人で道が埋つてしまひます」と書き記すほどの賑わいであった。

神輿渡御では、午後に住吉大社から神輿が出発し、大阪市と堺市の境にあたる大和川で采配が受け渡され、担ぎ手が大阪側から堺側へ交代する受渡式が行われる(図3)。日没頃に堺の宿院頓宮に到着すると、掛け声にあわせて勇壮な神輿振りが行われる(図4)。住吉神の宿る船神輿と鳳輦は拝殿内、神輿は拝殿前に奉安され、拝殿前での頓宮祭、飯匙堀での荒和大祓神事が営まれると、神輿等は住吉大社へ戻り、還輿祭が催行され、住吉祭全体が終了となる。

住吉三神(底筒男命、中筒男命、表筒男命)は、記紀神話によれば伊邪那岐命が黄泉国から地上に帰った際、禊ぎをして清めたときに現れた「祓」を司る神とされている。天平三年(731)から延暦八年(789)の間に成立したとされる『住吉大社神代記』では「六月御解除」の記事に「開口水門姫神社」(現在の開口神社に比定)とあり、古代より堺の地と祓の関連性がうかがえる。また、中世の記録では、堺荘は住吉社領とされることから、祓を司る住吉神の御神霊を住吉から神領地である堺へ迎え、町や人びとの穢れを祓い、無病息災を祈ることが祭の本質であったと考えられる。

飯匙堀での祓の記録については、重要文化財『大寺縁起』(元禄三年・1690)に「年毎のミな月つこもり(註・水無月晦)、摂津の国住吉より、大明神御幸ありて、此池(註・「飯匙の池)のほとりにて、天地一円相とて、貴き御祓あり」と見えるだけでなく、「しゃもじ」のような飯匙堀が描かれており(図5)、遅くとも江戸時代には飯匙堀での祓が行われていたことがわかり、300年以上にわたり現代まで受け継がれる神事であることがうかがえる。

以上のように、住吉大社宿院頓宮の祓神事(荒和大祓神事)は、住吉祭を構成する一連の行事のうち、祭りの本質ともいふべき「祓」を司る神事であり、近世以前にその起源を持ち、遅くとも近世には「飯匙堀」という歴史的空間で「祓」がおこなわれていることが確認できる点は非常に貴重である。

このようなことから、本神事は、堺の人々の信仰や生活文化の基底を成す祭礼・風俗慣習として本市にとって重要であり、歴史的価値が高いことから、無形民俗文化財として、保存継承を図ろうとするものである。

【参考文献】

『住吉祭・神輿渡御と堺（住吉祭・神輿渡御記録作成・調査研究事業報告書）』堺市地域文化遺産活性化実行委員会、2017年

表1 住吉祭の一連の行事次第

時期	行事
7月上旬	斎女宣状式
7月第3月曜日（海の日）	汐汲神事、神輿洗神事
7月30日	宵宮祭、遷霊祭
7月31日	粉黛式、戴盃式、夏越祓神事※、例大祭
8月1日	朔日祭、桔梗献花祭、 神輿渡御（渡御発輿祭） →大和川で大阪側から堺側への神輿受渡式 →宿院頓宮到着、頓宮祭、荒和大祓神事 →住吉大社に戻り、還輿祭

※大阪府選択無形民俗文化財「住吉大社の夏越祭」

【図版】

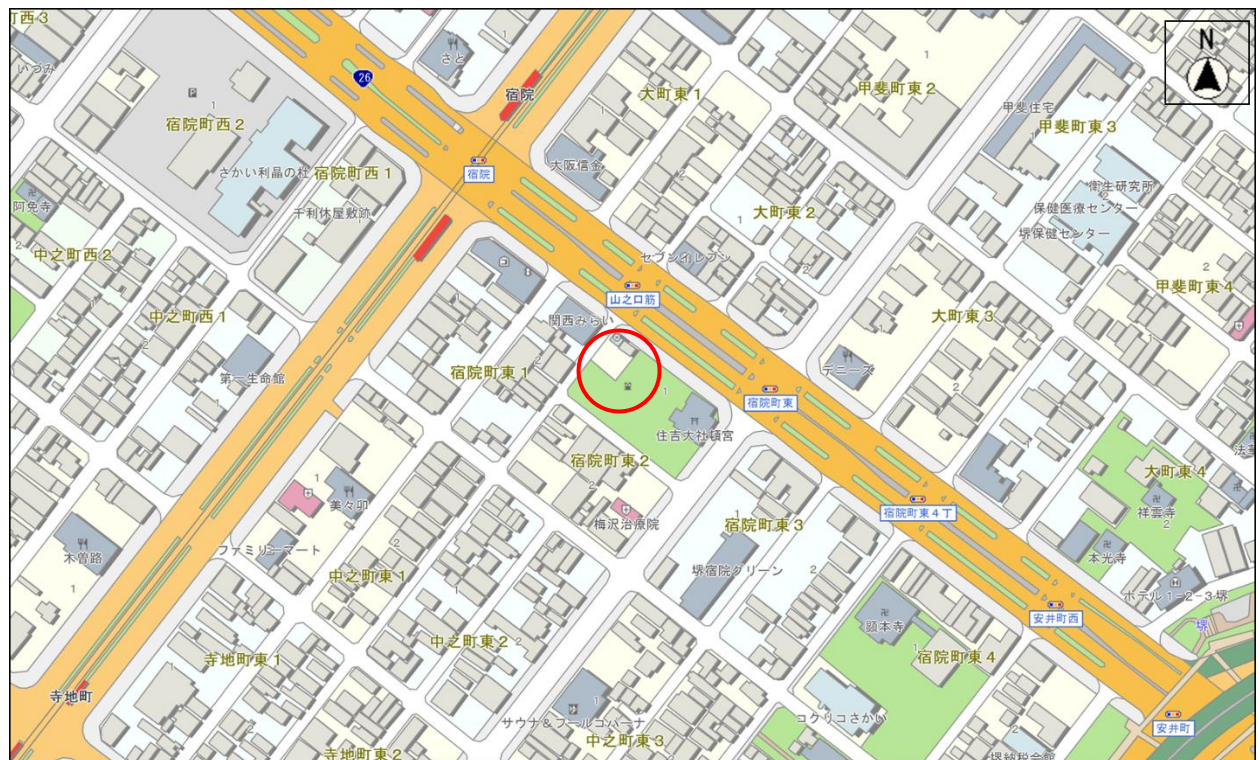
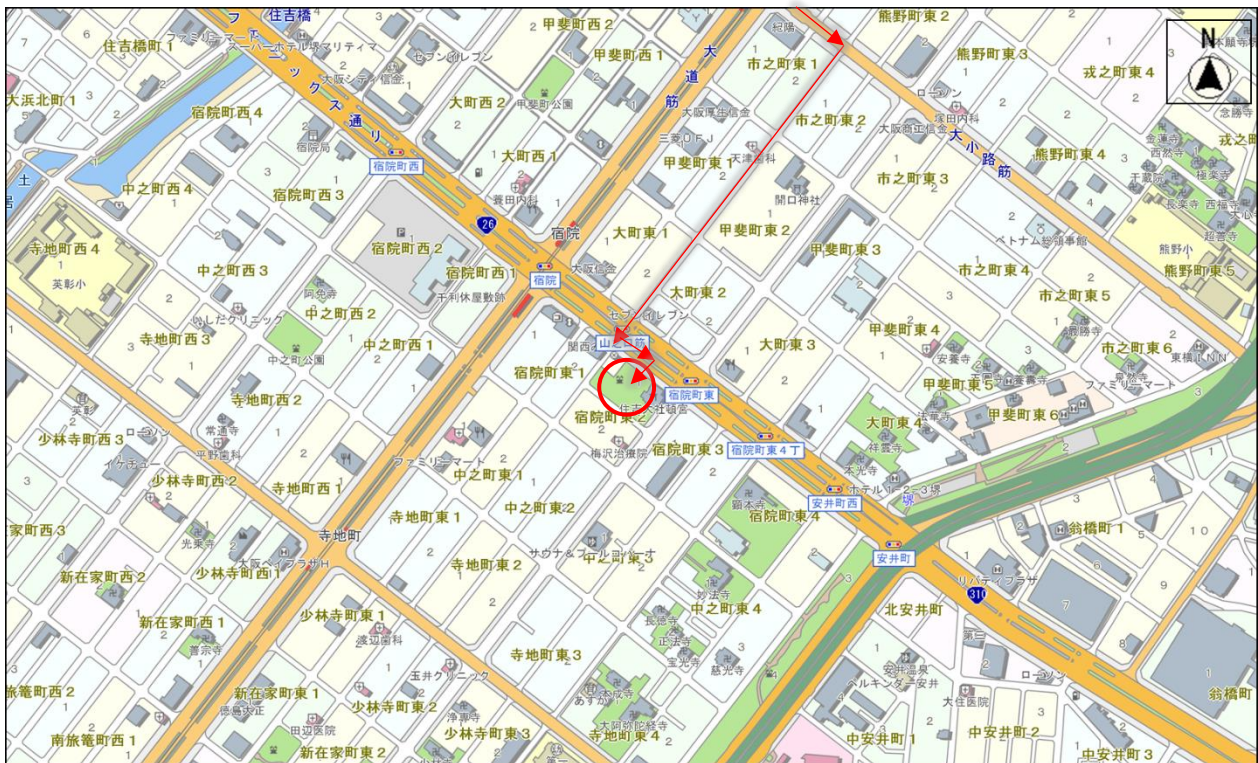


図1 宿院頓宮位置図（上）および飯匙堀位置図（下）

→（赤矢印）現在の神輿渡御ルート



図2 飯匙堀での荒和大祓神事の配置図（左・方角は加筆）とその様子（右）
 （以下、『住吉祭・神輿渡御と堺（住吉祭・神輿渡御記録作成・調査研究事業報告書）』より引用）



図3 堺側にわたる神輿



図4 頓宮到着時の神輿振り



図5 重要文化財 大寺縁起 元禄三年（1690）、開口神社所蔵

令和 4 年度堺市指定文化財指定候補資料

種 別	史跡
名 称	北村古塁（陶器城跡）
所在の場所	堺市中区陶器北 659 番の一部、660 番、661 番-2、753 番-2 の一部
所有者の氏名（名称）及び住所	個人
面 積	2,468 m ²
時 代	室町時代～江戸時代
解 説	

北村古塁（陶器城跡）は泉北丘陵にあり陶器川の上流に位置し、南北 200m、東西 180 mにわたる中世の城館跡「陶器城跡（北村砦跡）」として周知されてきた遺跡である（図 1・2）。周辺には、東に隣接する小角田（こかんだ）遺跡や南西約 400m に位置する陶器南遺跡などがあり、これらの遺跡では 12～15 世紀の「屋敷」や「居館」と推定される遺構群から成る中世の集落跡が見つかっている。

文献史料では、正平七年（文和元年、1352）六月付の和田蔵人助氏と淡輪彦太郎助重が楠木正儀に宛てた軍忠状（「和泉国御家人和田蔵人助氏軍忠事」（『和田文書』）、「和泉国御家人淡輪彦太郎助重申軍忠事」（『淡輪文書』））に「陶器城」の表記がみえ、現在は本遺跡がそれら軍忠状にみえる「陶器城」比定地の候補の一つになっている。

遺跡の現状は、一辺 14.0～29.5m、高さ 4.2～5.7m の方形土壇と、高さ 1.3～2.6m の土塁が残っている（図 3）。それらの遺構は、大阪府下の城館・城郭研究の基礎資料である文政元～二年（1818～1819）に岸和田藩士の浅野秀肥が纏めた城郭図面集『和泉国城館跡絵図』に収められる「大鳥郡陶器荘北村古塁之図」（以下、「絵図」という）に描かれた本丸跡や土塁の一部と考えられる。絵図には、中央の本丸跡が堀と土塁を巡らせた長方形の曲輪に対角に挟まれる構造や各所の寸法、周囲の地物などが描かれており、当時の詳細を知ることができる。

本遺跡では、昭和 63 年（1988）度の宅地造成に伴う立会調査や平成 4 年（1992）度の共同住宅建設に先立つ確認調査、平成 15 年（2003）度の下水管布設工事に伴う立会調査などを実施し、調査成果を絵図と照合し古塁全体の復元を試みてきた。さらに、平成 30～令和 2 年度（2018～2020 年度）にかけては、古塁の築造時期や遺構の残存状況を把握するために現地測量と発掘調査を実施し、曲輪の土塁と堀、本丸跡の盛土と堀を確認した。

本丸跡の東側に現存する土塁は、14 世紀以降に高さ約 1.2m の規模で築かれ、江戸時代には現状まで拡張されたとみられる（図 4 - ①・②）。土塁の北面は、絵図では「ホリ田」と記載のある場所にあたる。現在は平坦であるが、調査により、15 世紀には掘られ 18 世紀以降に埋められた幅 7.6m、深さ 2.4m の堀跡を確認した。

本丸跡の北側は、絵図では幅が「三四尺或壹丈」の「隍」と記載のある場所にあたる（図4-①・③）。現在は平坦であるが、調査により、15世紀後半には存在し、18世紀頃に再掘削と埋め戻しがなされた、幅2.9～3.5m、深さ約2.0mの堀跡を検出した。

本丸跡は四角錘台の土壇であり、石垣などの外装施設はない（図4-①・④）。絵図では、規模が「東西南北凡拾三間餘」と記載され、西辺を除く三方に堀が描かれている。本丸跡東側で実施した調査の結果、本丸跡に先行する堀が15世紀後半以前に設けられ、その後18世紀までの間に本丸跡が築かれたと考えられる。そして、18世紀頃には本丸跡を巡る堀で再掘削と埋め戻しがなされる。

考古学的な調査成果と現況の地形を絵図と照合して、絵図に描かれた北村古塁を復元すると、南側の曲輪は南北約120m、東西約95mの長方形に、北側の曲輪は南北約125m、東西約75mの長方形に、本丸跡は一辺28.8～29.8m、高さ約5.1mに復元し得る（図5）。現地に残る遺構や土地区画、発掘調査で確認された遺構は、絵図に描かれた遺構の配置や規模、形状において一致する点が多く確認され、絵図の信憑性が高まったと言える。

このように、北村古塁（陶器城跡）は、15世紀に堀や土塁が築かれ、18世紀頃に土塁の拡張や堀の再掘削がなされた城館跡であり、その全容は後に絵図に描かれ、そして現在も絵図に描かれた遺構が地上と地下に良好に遺存している。市内には中・近世の城館または陣屋と伝わる遺構が少ない中で（図6）、現地に残っている遺構が絵図に描かれた規模・形状と一致している点は極めて貴重であり、地域史の一端を物語る遺跡として非常に価値が高い。

よって、地上遺構が現存し、かつ発掘調査によりそれらの残存状況や規模、時期等を把握できている2,468㎡を史跡に指定し恒久的な保存を図るものである（図7）。

【参考文献】

- ・堺市 2022『陶器城跡（北村砦跡）発掘調査報告書－第3・4・5次調査－』堺市文化財調査報告第53冊
- ・堺市教育委員会 2007『平成14・15年度市内遺跡立会調査概要報告』堺市文化財調査概要報告第107冊
- ・堺市役所（編）1971『堺市史』続編 第1巻
- ・中西裕樹 2015『大阪府中世城館事典』図説日本の城郭シリーズ② 戎光祥出版株式会社
- ・福島克彦 2008『和泉国城館跡絵図』と城館研究－鬼頭文庫旧蔵絵図を中心に－』『岸和田古城から城下町へ－中世・近世の岸和田－』上方文庫34 和泉書院



図1 北村古壘(陶器城跡)位置図

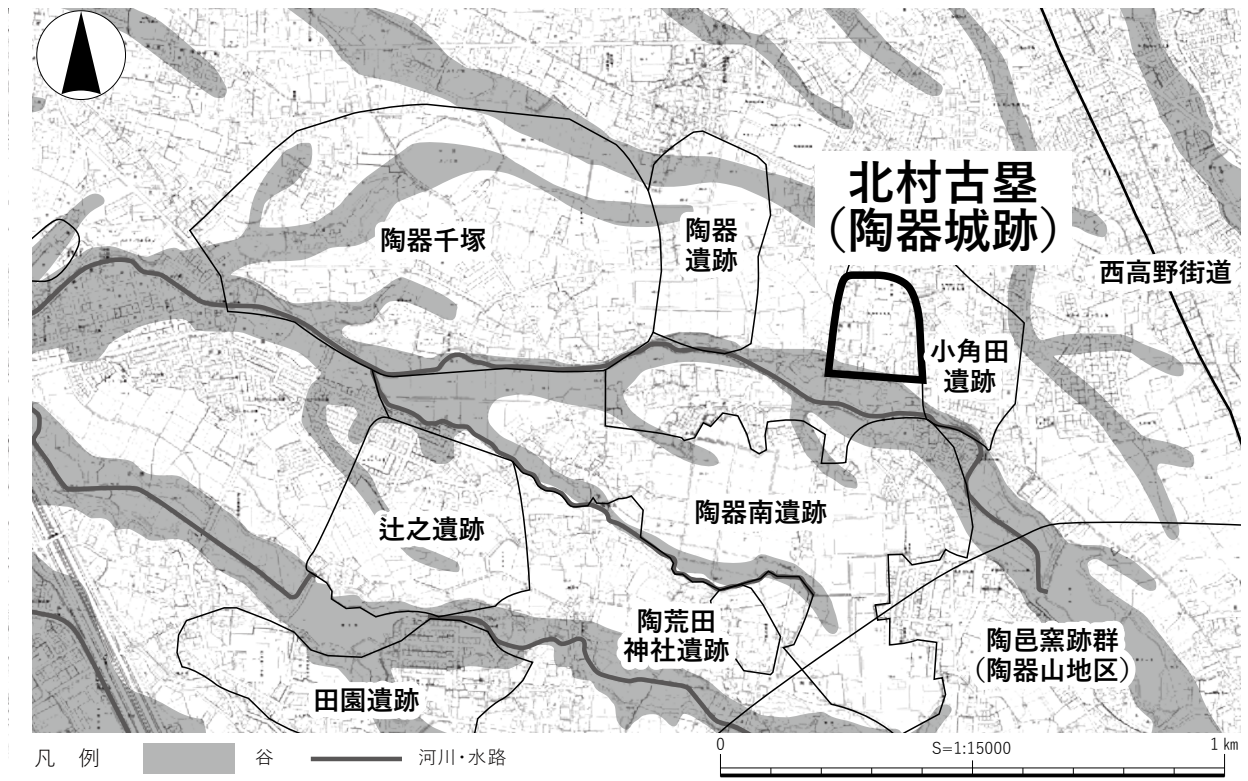


図2 周辺の遺跡分布図

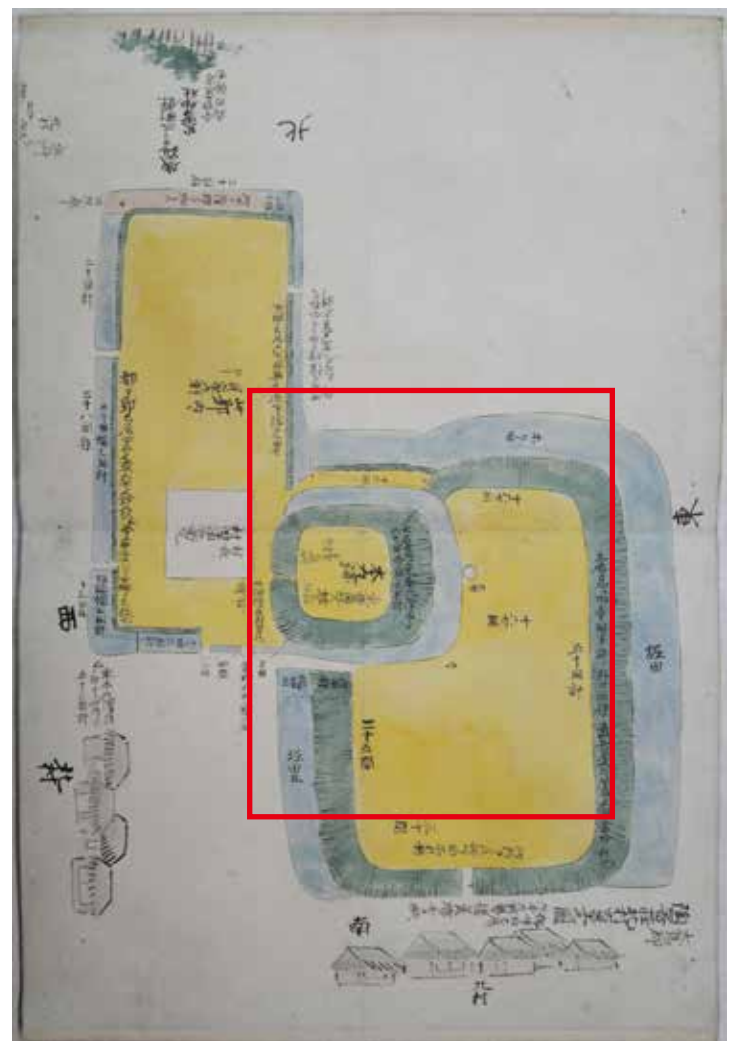
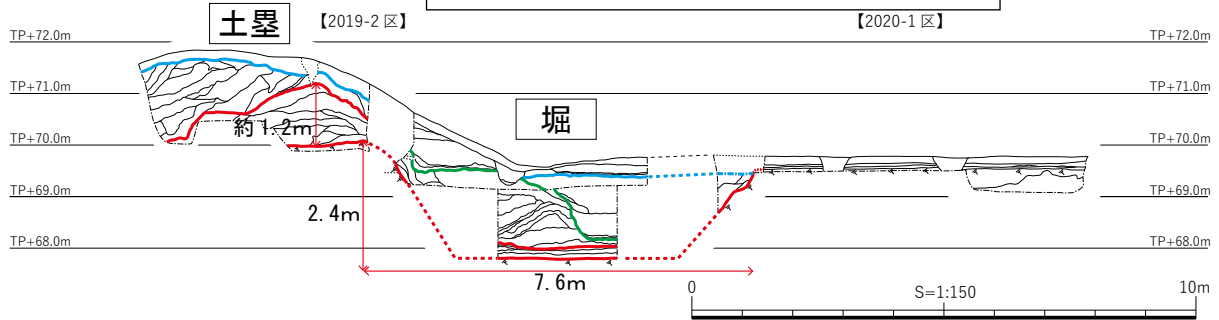


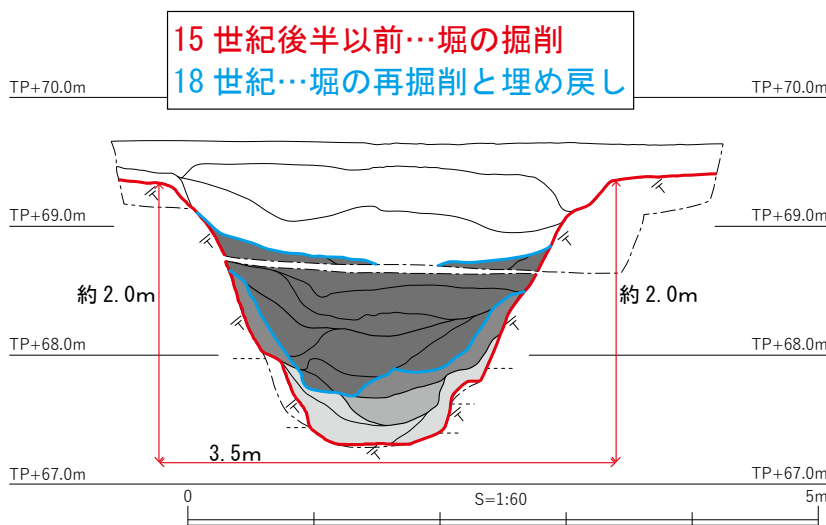
図3 現況測量図(左)と「大鳥郡陶器荘北村古壘之図」(右、赤枠は左図の範囲を示す)

【土塁】
 14 世紀以降…構築
 近世以降…拡張

【堀】
 15 世紀以前…掘削
 15 ~ 18 世紀…堀内の一部が埋められる
 18 世紀以降…埋め立てられる



②南曲輪北辺の土塁と堀の土層断面図 (2019-2・2020-1区西壁)

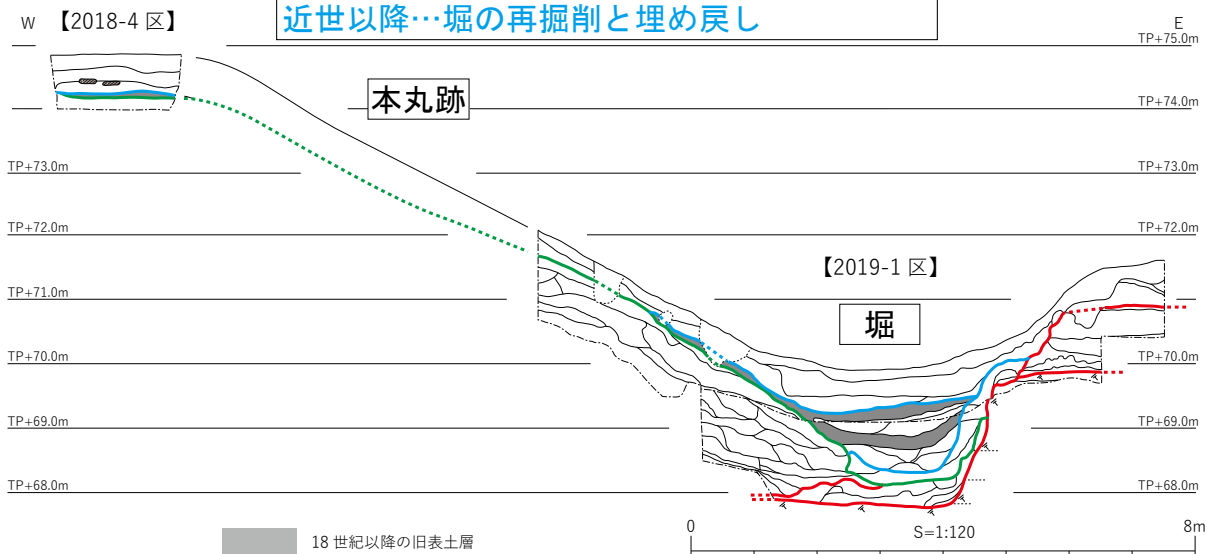


③北曲輪東辺の堀の土層断面図 (2020-3区南壁)



④土層断面図の位置

15 世紀後半以降…本丸跡に先行する堀の掘削
 15 世紀後半～18 世紀…本丸跡の築造
 近世以降…堀の再掘削と埋め戻し



④本丸跡東側の土層断面図 (2019-1区北壁)

図4 遺構の変遷

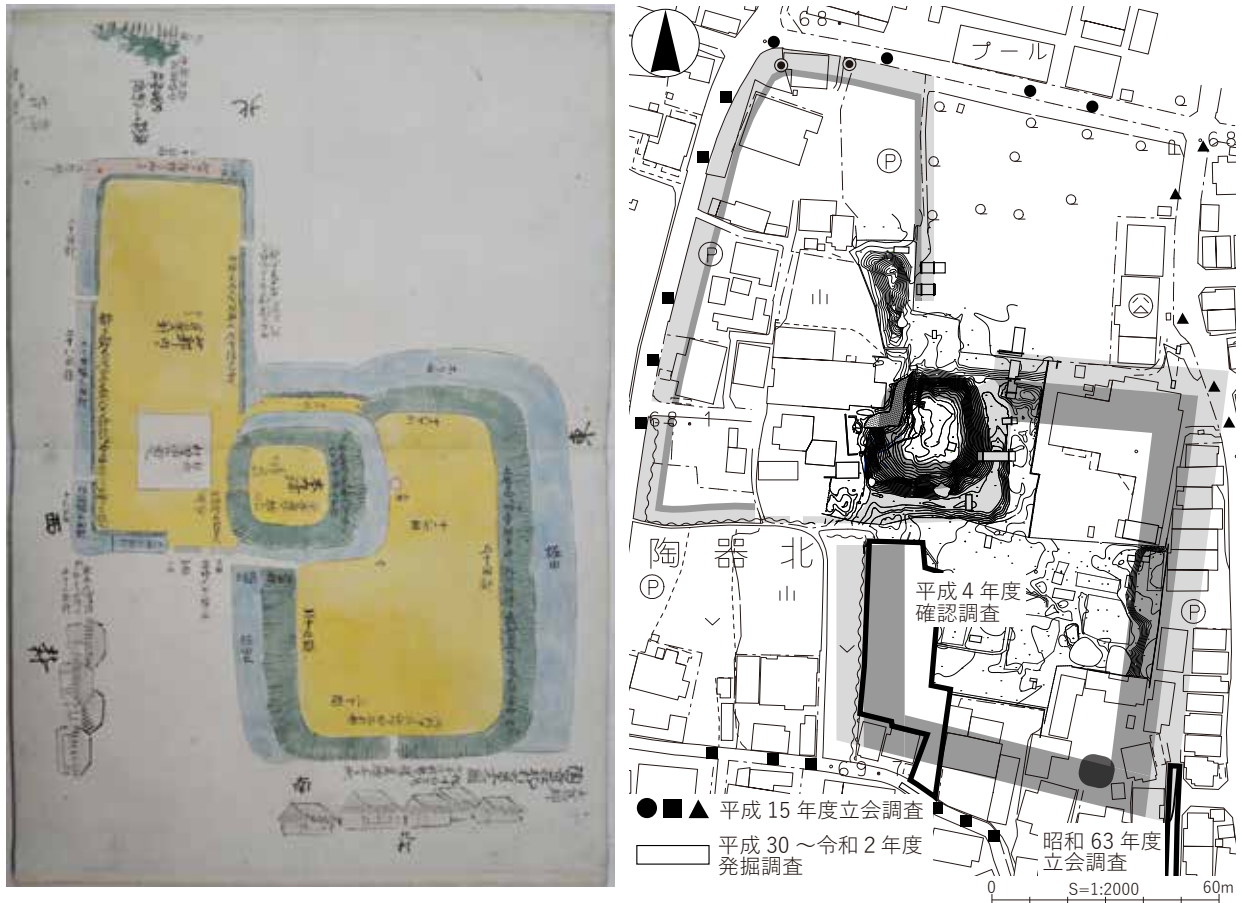


図5 「大鳥郡陶器荘北村古壘之図」(左)と文政二年時点の復元図(右)

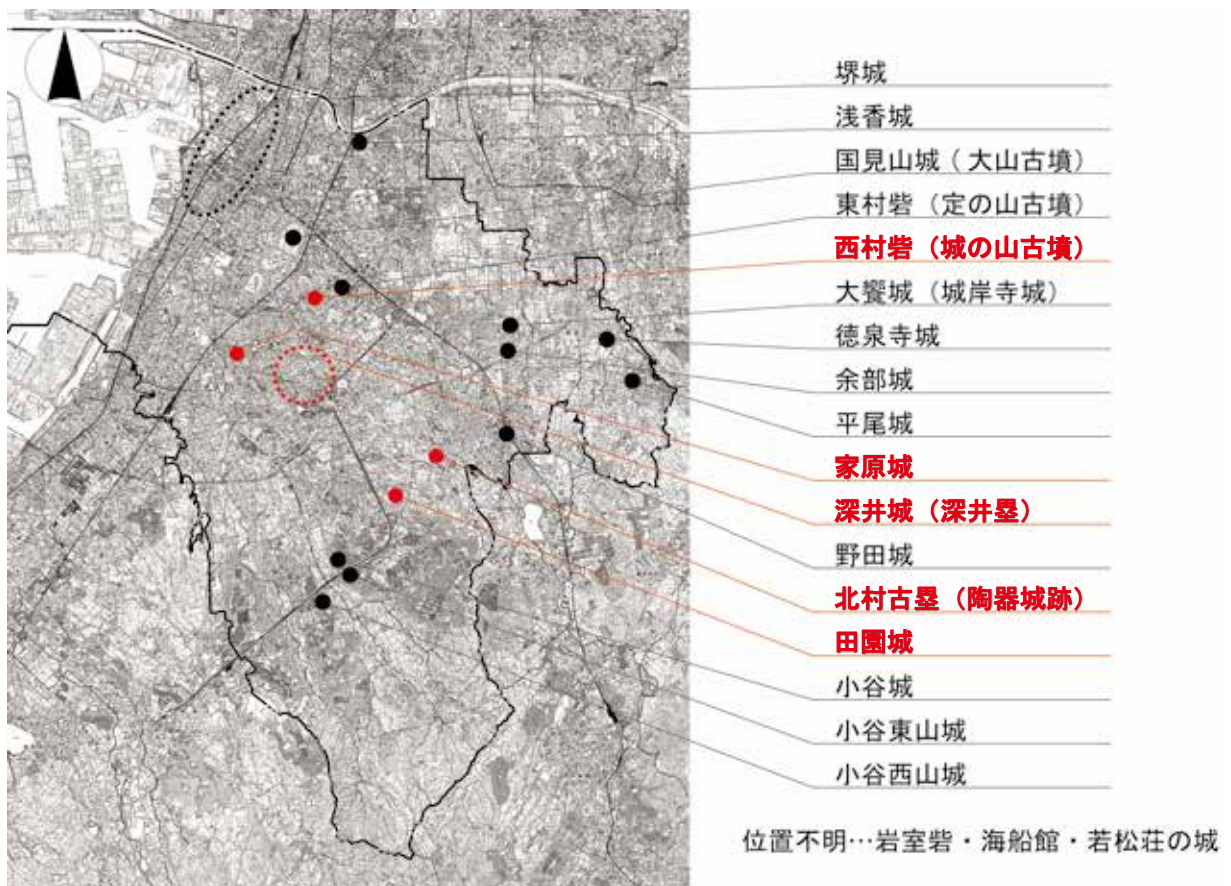


図6 市内の城跡(『堺市史』『美原町史』掲載分、赤字は『和泉国城館跡絵図』掲載分)



図7 史跡 北村古壘(陶器城跡) 指定範囲案